

ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相⑨

フランスにおける日本語学習の目的

前回(2025年9月号)に続いて、天理日本語学校の学習者数や学習者の年齢層の変化に関わる背景を探っていくが、今回はフランスにおける日本語学習の目的に注目したい。

管見の限りでは、国際交流基金が監修する海外の日本語教育機関に関する資料の中で、日本語学習の目的が体系的な形で初めて出るのは1998年度の調査である。それより前には、1993年度の調査で記述式の解答があったようであるが、各機関が自由に記述できる形式で共通の比較項目がないため、今回は考察の対象から外している。

図1は、フランスの学校教育以外の日本語教育機関における日本語学習の目的の中で、本稿の内容に関わる項目のデータを取り出したものである。それぞれの数字は、各年度の調査アンケートに回答したフランスの学校教育以外の日本語教育機関のうち、該当する項目を選んだ機関数の割合(%)になる。(たとえば、ある項目の数字が50となっている場合、それは調査アンケートに回答した日本語教育機関の5割がその項目を選択したということになる。)

それを踏まえた上で、このデータを見る際に注意しておかないといけない点を三つ述べておきたい。一つ目は、いずれのデータも、調査対象となった日本語教育機関が回答した内容であり、必ずしもそこに通う学生自身が答えた内容ではないという点である。中には、学生に確認をした上で回答している機関もあるかもしれないが、調査データからはその点が判断できない形になっている。二つ目は、年によって学習目的について選択できる数が異なっている点である。たとえば、1998年度から2006年度までの調査では、学習目的は5つまで選択できるようになっているが、2009年度以降はその上限がなくなっている。三つ目は、日本語学習の目的に関する項目が、調査アンケートが実施された年によって少しずつ異なっており、項目によっては設問が大きく変わっているものもあるという点である。

これらの点を踏まえると、このアンケート調査のデータを表に並べてみたとしても、日本語学習の目的の通時的な変化をたどるには適していない。(そういった誤解を避けるため、表には折れ線グラフではなく縦棒グラフを採用している)。そういった制約はあるものの、調査年ごとのデータとしては非常に有益であるため、そこから分かる範囲で考察を加えてみたい。

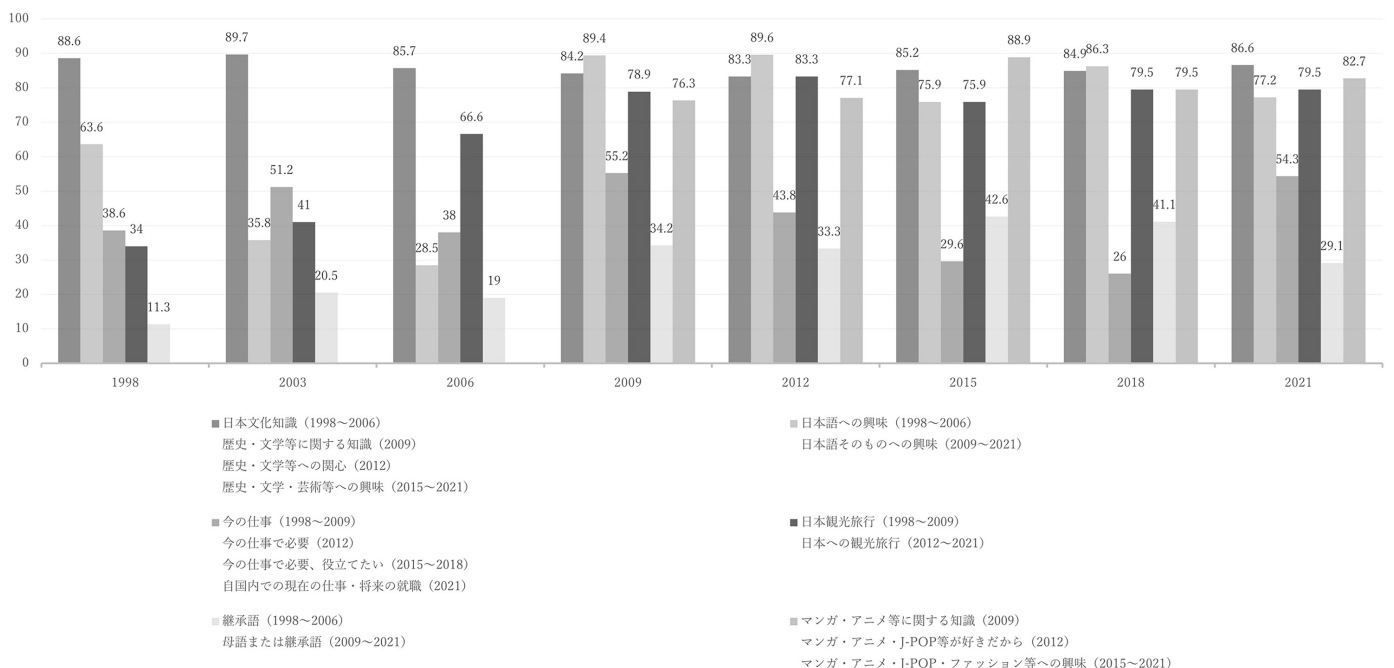


図1. フランスにおける日本語学習の目的(抜粋)(出典:国際交流基金 2005、2008、2011、2013、2017、2020、2023、国際交流基金日本語国際センター 2000。2015年度、2018年度、2021年度の調査については、国際交流基金ホームページ上に掲載の集計表も参照。)